あなたの望む人生の締めくくりは？

～知っておきたい色々なエンディング～

人生の最終章を悔いなく、幸せなものにするためには、何ができるでしょうか。エンディングデザイン研究所を立ち上げ、研究されている井上治代さんにお話を伺いました。

継承を前提としない墓の登場

桜の木の下に眠る「桜葬」という墓地があります。樹木をシンボルとした樹木葬の一種。これまでの日本のお墓の多くは、代々跡継ぎを決め、その者が管理料を払う形で永続使用されてきましたが、この桜葬墓地は跡継ぎを必要としないのが特徴です。

跡継ぎを必要としない墓というと、子どものいない夫婦や単身者が申し込むであろうと思われがちですが、子どもが「いない」はたったの24％でした。「いる」人の方が多く76％。そのうち「男子がいる」は48％と半数近いのです（2012年「桜葬」に関する会員意識調査／調査者：井上治代）。子どもがいても、男子がいても、跡継ぎを必要としない墓を買う人々の存在から、墓の継承制がもう制度疲労を起こし、現代人に適合しなくなっている状態が浮かび上がってきました。男子がいるケースでは、中高年で未婚であったり、子どもがいなかったり、障がいがあったり、海外暮らし、親より先に亡くなる、妻方の墓守りになってしまった、などさまざまな理由がありました。

そこで桜葬申込理由のベスト３をみてみますと、「自然に帰ることができるから」74％という自然志向に加え、「継承者がいなくてもいいから」58％、「跡継ぎのことなど、子どもに負担がかかるので、自分の代で終わりにしたいから」40％と、継承制から抜け出す人々の姿が浮かび上がりました（上位３位まで複数回答可）。もちろん子どものいない夫婦や、単身者もいますが、夫の実家の墓に入りたくない妻、ペットと一緒に入る家族、障がいを持った子どもを持つ家族、離婚した母親の墓を探す娘たちなどさまざまです。

従来の日本の墓の継承からいえば何ら問題のない男子のいる家族が多いということは、継承制そのものが制度疲労を起こし、機能不全の状態が露呈してきたといえるでしょう。そして伝統を乗り越えていく人々の姿が見えてきました。

個人化する葬儀

現代社会では、葬儀において故人と面識がなく、死の深い悲嘆を共有しない「義理の関係者」の参列を拒み、故人と関係のあった人たちだけで葬儀をとり行う傾向があります（私化）。また「自分らしい」葬儀を志向し、集団としての「家」や家族の儀礼から個人（故人）が単位の儀礼へ移行してきました（個人化）。さらに、仏教による宗教儀礼が主流ではありますが、それを省略する傾向も出てきています（脱「宗教儀礼」化）。また、子世代の数が減ったために遺族の人数も減り、それらのことが葬儀の小規模化の要因にもなっています。

戦後の高度経済成長期に都会を中心に葬儀は会社関係の参列者が増えて、社会的儀礼の側面を肥大化させていきましたが、80年代後半以降バブル経済がはじけたうえに、平均寿命の伸びで、後期高齢者の死は故人も子どもも「社縁」は期限切れとなっています。そこにプライベートな葬儀が好まれるようになった要因の一つがあるように思います。

私的な葬儀の１つである「家族葬」では、かつて一緒に暮らした家族が、全ての仕事を投げ出して昼夜故人を囲んで昔語りをする。一つ屋根の下で暮らした懐かしい家族の絆やつながりを確かめ合える唯一の時間が、今では葬儀となりました。メンバーの死という究極の境遇と時間を共有し、絆を確認し合ったら、またそれぞれの生活に戻っていく。そのような時間が持てず、大事な葬儀の折に故人に背を向け会葬者に頭を下げ続ける一般的な葬儀のあり方は、空しさが残るというわけです。

井上 治代（いのうえ はるよ）さん　プロフィール

東洋大学ライフデザイン学部教授（社会学博士）。「いのちの教育」「生死の社会学」「家族の社会学」などを教えるとともに、尊厳ある死と葬送の実現をめざした認定NPO法人エンディングセンター理事長として、「桜葬」墓地を核としたコミュニティ活動を展開している。自著に『最期まで自分らしく』毎日新聞社、『墓をめぐる家族論』平凡社新書、『新・遺言ノート』KKベストセラーズ、『墓と家族の変容』岩波書店、『子の世話にならずに死にたい－変貌する親子関係』講談社、『より良く死ぬ日のために』イースト・プレス、『桜葬－桜の下で眠りたい』三省堂、他多数。

選択する時代

2010年の国勢調査で日本の家族の形態のうち、一番多かったのが「単独世帯」だったことを皆さんはご存知でしたでしょうか？　おそらく日本史上初めての、モデルなき時代に突入したといえるでしょう。「葬送」は最後まで家意識が残った分野です。オグバーンという社会学者が「物質文化は産業化が起こるとすぐ変わるけど、精神文化は遅れて変化し、文化遅滞を起こす」と言いました。今がまさにそうです。核家族の最後は、子どもが巣立てば夫婦だけ、その一方が亡くなれば独居。このように家族機能が弱体化し、家族という集団ではなく個が単位の社会になりました。散骨・樹木葬・家族葬など、なぜこんなにいろいろなメニューが出て来たかというと、伝統的なものが意味を持たなくなったから。自分はこのように生きてきたからこのように死んでいきたいと選択する時代。人々は伝統の良さを踏まえつつも、それに代わる新しい追悼のあり方を模索しはじめています。現代人に合ったオールタナティブなものを、勇気を持って選択してみてはいかがでしょうか。

開催報告

おとなの総合学習

幸せなエンディングのために今できること

平成26年10月16、23、30日（木）　午後2時～4時

寒さが次第につのり、そろそろ紅葉の季節を迎える10月中旬、エポック10おとなの総合学習『幸せなエンディングのために今できること』が開催されました。定員を大幅に超えるお申し込みがあり、各回40名の方が参加してくださいました。

本講座は多様化するお葬式・お墓の現状やエンディングノートの書き方、大切な家族のエンディングをテーマにした映画の上映など、盛りだくさんの内容でした。エンディングがテーマの講座ですが、先生方の興味深いお話に、笑いあり、驚きあり、そして感動ありの充実した時間となりました。

講座終了後のアンケートでは、『これからの人生の生き方に頑張る勇気をもらえました』、『エンディングに関して有益なヒントを得ました』、『心に響き、心に迫る、すばらしいお話でした』等々のご意見をいただき、参加者のみなさんが講座に満足されている様子がうかがえました。

３名の先生方から、エンディングに関して様々なお話を伺い、「自分の幸せなエンディング」について考えて頂く、きっかけになるような充実した講演会でした。